

紅樓夢の成立過程について

(名古屋外国語大学) 船越達志

・資料① 賈瑞の一節 (あらすじ)

賈家の家塾の教師を務める賈代儒の孫、賈瑞(天祥)は、寧国邸において王熙鳳の妖艶な姿を見てすっかり魅せられてしまい、それとなく王熙鳳の気を引いてみる。勘の鋭い王熙鳳はすぐに賈瑞の魂胆を見抜くが、わざと王熙鳳も賈瑞に気があるかのような対応をみせる。実は王熙鳳は、賈瑞の言動に強い嫌悪感を覚えていたのであるが、一計を案じ、賈瑞を畏にはめてやろうとしていたのであった。それと知らぬ賈瑞は、大喜びで王熙鳳と密会の約束をする。しかしその約束は王熙鳳にすっぽかされ会う事が出来ない。もう一度密会の約束をした賈瑞が暗室で王熙鳳を待っていると、やってきたのは、すでに王熙鳳の知らせを受けた賈家の若者たち(賈薈と賈蓉)であった。賈瑞はその場でとりおさえられ、賈薈と賈蓉の二人に、それぞれ銀五十両を支払う、という約束をさせられる。賈瑞はすっかり恥ずかしい思いをして、やっとの事で家に帰るが、この衝撃により病気になってしまった。賈瑞の病気は一向に良くならないが、ある日、賈瑞は、跛足道士に“風月宝鑑”という名の鏡を与えられ、道士にその鏡の裏を見ていれば必ず病気は良くなるが、決して正面を覗いてはいけない、と言われる。賈瑞が裏を覗くとそこには骸骨が映っていたが、正面を覗くと王熙鳳の幻影が笑顔で賈瑞を呼んでいる。賈瑞はその招きに引かれて鏡の中で王熙鳳と情事を結ぶ。このようなことを三、四回繰り返すうちに、賈瑞はついに死んでしまう。賈代儒が怒って鏡を焼き捨てようとする、鏡は「誰が正面から覗けと言った。お前たちが勝手に仮を真とみなしたんじゃないか。」と叫び泣く。あわてて跛足道士がやってきて、鏡を救って去って行く。

・資料② 北村透谷『宿魂鏡』(『国民之友』第一七八号、明治二十六年一月) あらすじ

【『宿魂鏡』上】

山名芳三は奥州白河から東京へ学問をしに出てきた。大学まで進んだ折、某省の高官・戸沢男爵に見込まれ、彼の家に住み込み、政治学を実地に研究することになる。山名芳三には元来、親が決めた許婚・阿梅がいたのだが、戸沢男爵の邸の中で、一つ屋根に暮らすうちに、戸沢男爵の娘・戸沢弓子と相思相愛の関係になってしまう。しかし二人の仲に気づいた戸沢男爵の夫人が、山名芳三を邸から追い出してしまう。戸沢弓子は別れに際して、形見に「古鏡」を山名芳三に送る。

【『宿魂鏡』下】

故郷の白河に戻った山名芳三は、失意のあまり山間の一小村で、誰とも会わず孤独に暮らしていた。最愛の弓子を慕って、彼女がくれた「古鏡」を眺めるうちに、弓子の幻が現れる。また同時に怪物も現れる。怪物は「骷髏にして骷髏にあらず、人間にして人間にあらず」というものである。これらの幻を見るうちに、山名芳三は死んでしまう。一方東京の戸沢弓子は、山名芳三を恋い慕うあまり、病床に臥していたが、山名芳三が死んだ時間と同時刻に死んでしまう。

・資料③ 日本明治時代における『紅樓夢』受容の様相

【作品】	【鏡】	【意味】
①原作『紅樓夢』第12回	【宝鏡 “風月宝鑑”】	(「戒淫」の象徴)
→②島崎藤村の訳文「紅樓夢の一節—風月宝鑑の辞」	【宝鏡 “風月宝鑑”】	(「戒淫」の象徴)
→③北村透谷『宿魂鏡』	【古鏡 “宿魂鏡”】	(「精神的な恋愛の象徴」)
→④島崎藤村『春』	【“懐剣”】	(「精神的な恋愛の象徴」)

・資料④

賈瑞……只聽頭頂上一聲響啣拉々一淨桶尿糞從上面直潑下來。可巧澆了他一身一頭。賈瑞掌不住啞啞了一聲、忙又掩住口、不敢聲張、滿頭滿臉渾身皆是尿屎、冰冷打戰。(「庚辰本」第十二回)

→この一節は、優雅な『紅樓夢』全体の中では異質な場面である。

・資料⑤

空空道人……將這石頭記再檢閱一遍、……方從頭至尾抄錄回來、問世傳奇、因空見色、由色生情、傳情入色、自色悟空、遂易名爲情僧、改「石頭記」爲「情僧錄」。至吳玉峰題曰「紅樓夢」。東魯孔梅溪則題曰「風月寶鑑」。後因曹雪芹于悼紅軒中披閱十載、增刪五次、纂成目錄、分出章回、則題曰「金陵十二釵」……至脂硯齋甲戌抄閱再評、仍用「石頭記」。(「甲戌本」第一回)

→・第一回(「甲戌本」)には、「石頭記」「情僧錄」「紅樓夢」「風月寶鑑」「金陵十二釵」という五つの書名が記されている。

・ここに、「風月寶鑑」の四文字が登場する

・資料⑥

雪芹舊有風月寶鑑之書、乃其弟棠村序也。今棠村已逝、余睹新懷舊、故仍因之。（「甲戌本」第一回眉批）

→作者曹雪芹がかつて、「風月宝鑑」という書を執筆したことがあった、ということを示している。

・資料⑦

【「風月宝鑑」位置づけに対する学界の二つの説】

- ①「一稿多改」説……「風月宝鑑」を現行本『紅樓夢』の雛型原稿とみなす説（胡适、俞平伯、伊藤漱平等）
- ②「二書合成」説……「風月宝鑑」を現行本『紅樓夢』とは全く別個の小説と位置付ける。『紅樓夢』（の旧稿）と「風月宝鑑」の二書が合成して現行本が出来上がったとみる説（周紹良、太田辰夫、杜春耕等）

・資料⑧

「秦可卿淫喪天香樓」、作者用史筆也。老朽因有魂托鳳姐買家後事二件、豈是安富尊榮坐享人能想得到者。其言其意、令人悲切感服。姑赦之。因命芹溪刪去「遺簪」、「更衣」諸文。是以此回只十頁。刪去天香樓一節、少去四、五頁也。（「靖藏本」第十三回回前總批）

→元来のこの一節の回目には「秦可卿淫喪天香樓」という文句があり、作者の家庭内の事件を題材にしたものだったが、評者が雪芹に命じて「天香樓の一節」の四、五頁を削らせたもの、ということがわかる。（「甲戌本」にも同趣旨の評がある）

・（現在推定されている元々の秦可卿の死（「天香樓一節」）

秦可卿は舅の賈珍と男女としての関係をもつようになり、それを侍女に知られ、恥じた秦可卿が天香樓で首をつって死ぬ。

・資料⑨ 第十二回脂硯齋評

・鏡は表と裏の両面が映せるという箇所が付された評
「此書表裏皆有喻也。」

・その鏡を決して正面から覗いてはいけない、という言葉が付された評
「觀者記之。不要看這書正面、方是會看。」

・鏡によって孫を殺された賈代儒が鏡を罵る場面に付された評
「此書不免腐儒一謗。」

・鏡は焼くべき、という言葉に付された評
「凡野史俱可燬、獨此書不可燬。」

(「己卯本」「庚辰本」「王府本」「有正本」の各本に付された評)

→これらはみな、本文中の鏡“風月宝鑑”を鏡そのものではなく、書物として扱っている。

・資料⑩（「風月宝鑑」をめぐる成立過程【推定】）

(I) 元来、『紅樓夢』(の原型)とは別個の小説「風月宝鑑」が存在した。それは、秦可卿のモデルを哀悼する意が込められたノンフィクション風の小説であり、宝鏡“風月宝鑑”が出現するわけではなかった。

(II) 後に、小説「風月宝鑑」中のいくつかの場面が『紅樓夢』(の原型)に挿入されることになった。

(III) しかしその中の「秦可卿の死」が『紅樓夢』(の原型)に挿入される際、「脂硯齋評」評者の指示により(資料⑧前掲)、内容が大幅に削除・変更され、「戒淫」の主旨が消えた。

(IV) そのため、「戒淫」の意を色濃く出した「賈瑞の一節」を俄かに作り、秦可卿の死の直前に置いた。この「戒淫」は、とりもなおさず小説「風月宝鑑」の主題でもあるため、この一節に、宝鏡“風月宝鑑”を登場させた。

・資料⑪

警幻道「……再將吾妹一人、乳名兼美、字可卿者、許配與汝。今夕良時、即可成姻。不過領(令)汝領略此仙闈幻境之風光尚然如此、何況塵境之情景哉。……」説畢、便秘授以雲雨之事。推寶玉入房、將門掩上自去。那寶恍々惚々、依警幻所囑之言、未免有兒女之事、難以盡述。(「庚辰本」第五回)

・資料⑫

(警幻)「……吾所愛汝者、乃天下古今第一淫人也。」……警幻道「……淫雖一理、意則有別。如世之好淫者、不過悅容貌、喜歌舞、調笑無厭、雲雨無時、恨不能盡天下之美女供我片時之趣興、此皆皮膚淫濫之蠢物耳。如爾、則天分中生成一段癡情。吾輩推之爲『意淫』。『意淫』二字、惟心會而不可口傳。可神通而不可語達。……」(「庚辰本」第五回)

・資料⑬

至次日便柔情繾綣、軟語温存、與可卿難解難分。因二人攜手出去遊玩之時、忽至了一個所在、……迎面一道黑溪阻路、……警幻道「此即迷津也。深有萬丈、遙亘千里。……耳（爾）今偶遊至此、設如墮落其中、則深負我從前諄々警戒之語矣。」話猶未了、只聽迷津內水響如雷、竟有許多夜叉海鬼將寶玉拖將下去。嚇得寶玉汗下如雨、一面失聲喊叫「可卿救我。」（「庚辰本」第五回）

・資料⑭

（寶玉）便把夢中之事細說與襲人聽了。然後說至警幻所授雲雨之情、羞的襲人掩面伏身而笑。寶玉……遂強襲人同領警幻所訓雲雨之事。（「庚辰本」第六回）

・資料⑮ 「石の神話」（要約）

女媧氏が天を修繕する際、使い余された一個の“石”が大荒山無稽崖青埂峯のふもとに捨てられた。ある日その“石”は、僧侶と道士の話す俗世間の話題に興味を引かれ、僧侶と道士に俗世間へ連れてってくれるよう頼む。そこで僧侶は、この“石”を美玉に変え俗世間に送りこむ。美玉となった“石”は賈宝玉の口に含まれて世に落ち、彼の人生を観察する。後、“石”は見てきた経歴を“石”自らの上に書き記す。これが「石の物語」、つまり「石頭記」（すなわち現行本『紅樓夢』）である。（第一回冒頭）

・資料⑯ 「還淚因緣譚」

那僧笑道「……西方靈河岸上三生石畔有絳珠草一株。時有赤瑕宮神瑛侍者日以甘露灌溉、這絳珠草始得久延歲月。後來既受天地精華、復得雨露滋養、遂得脫卻艸胎木質得換人形、僅修成個女體。終日遊於離恨天外、飢則食蜜青果爲膳、渴則飲灌愁海水爲湯。只因尚未酬報灌溉之德、故甚至五內便鬱結着一段纏綿不盡之意。恰近日這神瑛侍者凡心偶熾、乘此昌明太平朝世、意欲下凡、造歷幻緣、已在警幻仙子案前掛了號。警幻亦曾問及灌溉之情未償、趁此倒可了結的。那絳珠仙子道『他是甘露之惠、我並無水可還。他既下世爲人、我也去下世爲人、但把我一生所有的眼淚還他、也償還得過他了。』因此一事、就勾出多少風流冤家來、陪他們去了結此案。」（「庚辰本」第一回）

・資料⑰

這日不知爲何、他二人言語有些不合起來。黛玉又氣的獨在房中垂淚。（「庚辰本」第五回）

・資料⑱ 「甄士隱と賈雨村の物語」（要約）

姑蘇に住む甄士隱は土地の名士として悠悠自適な生活を送っていた。その隣には貧乏書生の賈雨村が仮住まいしていた。中秋の節句の折、賈雨村は甄士隱に、科擧の試験を受けたいが先立つ費用が無い旨を打ち明ける。甄士隱は早速費用を用立てて賈雨村に貸し与える。

雨村は翌日旅立つ。やがて元宵の節句の折、甄士隱の一人娘英蓮が失踪してしまう。続く三月、甄士隱の家は火事に巻き込まれすっかり焼けてしまう。しかも災害が続き、甄士隱は仕方なく妻の実家に身を寄せることとなる。しかしそこで甄士隱は色々と窮屈な生活を強いられる。ある日甄士隱は一人の道士に出会い、そのままその道士につき従って失踪してしまう。逆に賈雨村は科挙に合格し、その土地に知府として赴任する。しかし賈雨村は上役に弾劾され、再び役を解かれてしまう。(第一、二回)

・資料⑱

- ①「石の神話」(第一回) → 『石頭記』という物語そのものの縁起
- ②「還淚姻縁譚」(第一回) → 「恋愛譚」の発端
- ③「甄士隱と賈雨村の物語」(第一、二回) → 「貴族生活崩壊譚」の主題の縮図
- ④「警幻仙姑の神仙世界」(第五回) → 「色恋」に関する場面の発端

・資料⑳

【書名】	【書名の意味】	【想定される内容・主題】
「石頭記」	石の記録	石に刻まれた物語
「情僧録」	情僧の記録	愛情により出家した僧侶の記録→「恋愛(悲恋)」(恋愛譚)
「紅樓夢」	紅 <small>あか</small> きたかどのの夢	貴族生活とその崩壊による無常(貴族生活崩壊譚)
「金陵十二釵」	金陵の十二美人	才能ある美しい十二人の女性たちを描く
「風月宝鑑」	色恋の鏡	戒淫

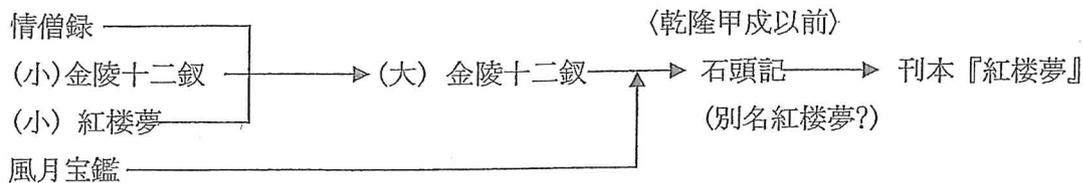
・資料㉑

【各神仙世界】 【推定】

- ①「石の神話」→現行本『石頭記』の縁起
- ②「還淚姻縁譚」→「情僧録(情僧の記録→愛情により出家した僧侶の記録)」の導入部
- ③「甄士隱と賈雨村の物語」→「紅樓夢(紅あかきたかどのの夢)」の入話
- ④「警幻仙姑の神仙世界」→「風月宝鑑(色恋の鏡)」の発端

・資料②

『紅樓夢』成立の全過程想定図



★ (想定図) の説明

(I) 元来、「情僧録」「金陵十二釵」「紅樓夢」「風月宝鑑」の四書の別個のミニ小説が存在した。

(II) その後、「情僧録」「金陵十二釵」「紅樓夢」の三書が統合され、その際に「金陵十二釵」(「(大)金陵十二釵」と表記)の書名が採用される(前掲資料⑤の「曹雪芹于悼紅軒中披閱十載、增刪五次、纂成目錄、分出章回、則題曰「金陵十二釵」」の記述に基づく)

(III) 次に「石の神話」が冒頭に設定され、書名が「石頭記」となる(別名として「紅樓夢」とも称される)。(乾隆甲戌以前)

(IV) 「風月宝鑑」の一部が挿入される

(V) 乾隆56年に「紅樓夢」の書名で刊行される(「程甲本」の刊行)

(付記)

本講演は、以下の拙稿をもとにしております。

- ・「紅樓夢の成立 明治の文人の受容から」(『アジア遊学』No105) 2007年12月
- ・「試論《紅樓夢》第12回在日本的早期傳播及日本文人的影响」(《紅樓夢學刊》2008-5)
- ・「『紅樓夢』神仙世界に関する試論—警幻仙姑の訓戒を中心にして—」(『中国学研究論集』第十二号(2003年12月)、拙著『『紅樓夢』成立の研究』(汲古書院、2005年)第五章所収)

【主要参考文献】

- ・ 俞平伯『紅樓夢辨』中巻「論秦可卿之死(附録)」(叢書東洋書館、1933年)
- ・ 笹淵友一「透谷の『宿魂鏡』について」(『文学』23-5、1955年)
- ・ 太田辰夫「『紅樓夢』新探—言語・作者・成立について—(I)、(II)—」(『神戸外大論叢』16-3・4、1965年)
- ・ 伊藤漱平「日本における『紅樓夢』の流行」(古田敬一編『中国文学の比較文学的研究』)

1986年汲古書院刊行、後に『伊藤漱平著作集 第三卷』(汲古書院)所収

・朴承柱「島崎藤村の『春』における「懐剣」の象徴性について」(『言葉と文化』3、2002年)



第百二十二号
甲の巻

注意

社説 人生大時機 びに慣習一新 小策 人の道念を開発し其徳性を
 列擧し社會上慣習の大ひに改良せざる可らざるを論辨す。東花坊我れと刺激すの一篇は言ひ
 及ぶ者の情 小説中の女主人 説中の女主人公を論評す。人々
 繪を悉し 小説中の女主人 説中の女主人公を論評す。人々
 は若松しづ子が種々の人物を寫すものにて今回は文學 紅樓夢の一篇
 者のホームと題し、書齋に於ける文人の一篇を穿ち 紅樓夢の一篇
 風月寶鑑の辭は世界に有名なる支那一大小説の標本に 歌念佛の細評
 が筆にて例により戀思愛情の極秘を穿鑿し 教育學 附録は第一章教育と
 たり。亦た今回より月一度の附録とする 教育學 附録は何ぞやの段に
 て古今の學說を擧げ遂に講述者が一家私見を述べたり。

明治二十五年

六月十八日發兌

倉の中の貯蓄を出せば、倉は空處、消費たり、貯はへたり、出来ぬ道理で、人の精神を爽快にし、公平、愉快、寛大に物この判断を助ける利源液といふものが皆無になつては、眞實の眞實が遠く来て、精神の活潑の時とは、眞實の眞實のあらざるの。精神を蔽ふて居た沙が引去つた隙は見るごとく、臭くとも嫌は兼た嫌はずが、是も貴人にとつては致方があるとし、た處で、自分の家から火事を出して、隣に飛来といつて知らぬに、行く嫌などはせぬと、思へば、妻に對し、娘に對し、何れも大に對してとんだ遺棄を氣にせぬとよ、我身ながら頭を擡たり、先づ夫より手説をいはんと、主人は手を伸し、

「ア、一寸来い、と彼方の隅に身を垂れて、頼しめたけにこちらを眺めて居る顔だに、

「こゝへ来いよ、可愛うにな、中直りをしよう、好しく、旦那がすねて居たか？ モウ好いと、旦那も氣がついたから、嫌なしてくれよ、ア、

「ア、はなと素直く出られて、嬉しさを現はさうと、ちぎれる手に尾を振り上げた。

それから花子に對ひ、花子に忠告を申し弁せ、おれの歴史的の諷刺は、取捨でも勝手だ。それで仕舞のお通真はどこでも御自由に出入れなされるが好い。

と憎氣なく四方へ詭言をいひ、その幾多の夏を離させ、冬を渡させて呉れた終生の内助者なる夫人、浮くも沈むも、思ふも伸るも、千變万化の動静を悉く知り、盡したるは、夫の體もなく氣の無立を見て、落着いたは、赤子の齒の生くるむらかりを見ると、興つたとはなく、一言詭をいひたか、

「ア、何んですよ、およい遊ばせ、わたしはよく侍じて居り、丹よ、改めて何も仰さずとも。

紅樓夢の一節

風月寶鑑の辭 無名氏撰

これは痴情の爲に瘡死する賈瑞なる人物を借りて、果は色即是空なる神機を悟り得ざりしことを叙せる一節也。賈瑞もと一痴漢にして而も邪僻あるに鳳姐なる女に罪はれ、その手はるゝを知らずして遂に痴情の爲に死せるを

織したり。

鳳姐といふは王鳳姐なる女にしてもとより刀劍の才を有し、飽くまで賈瑞のあかかなるを知り正色をもて其言ふところを斥けず、邪言を用ゐてその心神を惑はしめ、かくその情念を執弄して遂にこの風月寶鑑の一段にいたり、殞命の大醫藥に入るの脚色なり。

この風月寶鑑の辭は即ち賈瑞が鳳姐の爲に辱められて家に歸りしより筆を遺し痴情に生を垂る光景に筆をとりたるなり。

花の纏め身は一睡の中にし、向あやにくに居れたまきものは、觀るか、賈瑞はこゝに一生の恥辱をとりあのれの家へ歸りしが、心はなはだやかならず。鳳姐はあのを玩びしことを想ひて、一度は恨みに胸のふさがりしも道理なり。それとその花の袂の眼に落ひてはまた恨みもならざるに、思ひは懐にひすばれて胡亂に一夜まなごを合せしともあはざりかり。これよりして賈瑞は鳳姐のここのみ思ひつひしが、前日の恥辱に懲りてまた樂庵に往かむとはせず。このこの祖父の耳に入るを懼れ、朝夕の矢の催促に身を繰る賈瑞

等への銀子を調へむる職事なし。

あはれよ、戀と愛憎の手脚を引ては心の胸もわがなせず。その日用の工銀といふもいかにで穿きたる手にのく、渠は二十歳を越へし身なるに、尙もた、婦の衣を迎へ、ひたすら鳳姐のここのを想ひて、實にその面影の女や、春の感の思ふらしに、通ふ。されば言れむとして相罵らるに、深く身をくらしめ、解をいたむうら、眠さずも病の流に伏す身とはなりぬ。いかなる故にや心の内腹に、銀さの、一として、睡を覺えず。剛より下は、癖のどとく、眼のうちは、腫れも他たり。あはれむべし、渠は瘡癩へて、瘡癩には、結き血を交へ、すて、程の重症は、一年を保つべきにあらざるに、渠はかたかその苦みに堪へ得べむ。眼の上になり、一の頭の置所なく、たゞ、夢魂顛倒して、ちやうに、あかかなることのみを言ひあむりぬ。まことにその瘡癩の世の帯にあらざるなり。腫腫を招きて、あかかなる瘡癩を、瘡癩は、肉連、鬚子、鬚甲、髮、五、竹のたぐひを、盡し、藥十片をなく、故、女、下、せ、も、利、目、といふものは、真に見えざりけり。

春れ行く年を送りてまた來む春を迎ふることを一夢と思ふ間に



渠の病は重きを加ふるのみ、いかなる療養もその甲斐なかりしが、ここに賊屋道人といふもの忽然として來り、痼疾の症を治するに妙を御たりといふ。

買端「うちにあつて之を聴き、おはれ菩薩の來りてわが一命を救はんとするなり。早くこれを抱き入れよとあるに、衆人皆ひなくかの道士を擁近しく連れ來りぬ。買端は腰を擧げて、菩薩「わが命を救ひ賜はずと進味すれば、かの道士のくく嘆息の音も、うちにて、そなたの病氣はなみの藥にて直らぬも道理なり。イヤここに妙藥があれば、これをそなたに進ませましよう。これを毎日御に飲めば、そなたの命も保ちますといひつゝ、うちをもちて世に人を照すべき鏡をとり出せしが、うちには「風月鏡」の四字を垂着たり。道士これを病人の手に渡し、ももこれはこれ大徳元徳靈殿上にははしませ、聖幻仙子の御作にて、第一に邪惡妄動の病を治するより、經世治生の功徳ある御物。拙者がこれをもちて人間の世に來るといふも敢あること。決してその鏡の正面を御覽あるなるといふも、昔の方のみ照して御覧れ。おなかしこく、今日より二日目に拙者が參上いたすに、よつて、その鏡は「風月鏡」

「を返しなされといひつゝ、衆人のともむるを聴かずして御符を立ち去りぬ。

買端は今道士よりあやしむ鏡を得しが、ちたまんざら言を言ふのではあるまい。一先その鏡を照し見るべしと、「風月鏡」を拿りて反面を照しけるに、一個の斷骸その裡に立ちてありけり。

買端忙しくこれを握りかきし、エ、道士め、うちをきぬ。人を嚇すにも理がある。さはいへその正面は如何ならむと、このたびは正面を照しけるに、いかにしつゝ最愛の風姐その裡にありて首を斬き手を抱きて痕を呼ぶあり。わやしやと買端は心中に驚ふこと一方ならず。慙々として心も置けなむなり、鏡へず鏡のうちに入りて風姐に遇ひしよとを言へば、風姐また痕を添ふて鏡の外に出で來りぬ。ア、アといふ一躍して、眼を睜き反面を見れば例の如なじげの斷骸のみ。

買端は病床にありて汗しんくも身を侵し、正面を照して風姐に置かれ、反面を照して斷骸にをそれ、かくて三四度も鏡を返しけるに、二八寸の誰とも知らぬもの馳せ來りて鏡の鏡に葉を卷き、例の鏡を奪ひ去らむとせり。おのれ鏡をわなすべ

きかど一躍、胸を叩きしのみ、復もその言を御さるに、かたはらなる看籠の八々これをあやしむ馳せ寄れば、買端の身はずでに氷のむくとなりてありぬ。

現代僧徒のみなしなほ如何にせや。エ、むだたらしい道士め、アアアア今買端の體を置してよとせ。アアどうして殺した、どうして直す。この「風月鏡」をやらば見るもけがらしい、こんな痼疾があればこそ、可愛の買端まで亡いものにしたも、おはれは氣も狂亂の怨怒に堪へずや、かの鏡をとりて水中に投げてけり。

買端は何處もなく空中に懸りていふ。たれか、儚々に鏡の正面を見よと、儚々は儚のうつゝの聲にうかれて、これを眞と感ふこと、感ふさよ。うたてや何の爲に我がこの鏡を驚き捨てしといふら、かの鏡空中より家の外に飛び出でぬ。代僧門を出でく見らに、かの痼疾道人わが家の外にありて、誰かこの「風月鏡」を驚きけむといひつゝ、鏡を握りてそのふところに入れ、かくて飄然としてその影を失はたるぞわやしき。

批評

歌念佛を讀みて

透 谷

眞林子の世説、戯曲十中、八は主人公を遊樂内に取れり。其薄情な地より取り來りたる者は、其た少敷なる中に、夏清十郎、歌念佛は傑作として知られたり。余は歌念佛を愛讀するの餘、其女主人公に就きて感得たることを有る體に筆に吐んとするのみ。若し眞林子著作の細部を聴かんとする者は、らば透谷先生又は夏村翁が所へ行かざるべし。余は眞林子を評すと云はんや。

中の卷の發端に、かゝる體には、似似、娘は長は、露き、露きと、悲憤心と、地は、りて、婦人、昔もの、びく、の、……と、響出し、て、夏に、歸に、懸、ある、事、を示せり、然れども、昔もの、びく、といふところにて、鏡々の眼には、極めて、慶女らしく、見ゆる、事、を知せたり。清十郎、即ち、夏、の、情、人、を、水、坂、より、戻り、來り、たる、事、を、次に、出して、目と目と合する二人が、中、無事、あり、見、て、嬉、し、と、心に、心を、言、せ、たり、と、有、處、にて、更に、二人の、情、察、の、秘密、を示せり。